

# 研究結果報告書

## 植民地朝鮮における朝鮮仏教の〈抗日－親日〉表象：その論理の再構築

所属：東西大学校 外国語学部 日本語学科

役職：助教授

氏名：諸 点淑

本研究は「植民地朝鮮における朝鮮仏教の〈抗日－親日〉表象—その論理の再構築」をテーマとして、植民地朝鮮という「場」において宗教の概念化がいかに行われてきたか、それを朝鮮仏教、日本仏教との関係に着目して韓日での資料分析と仏教関係者へのインタビューにより調査、分析したものである。その結果として大きく次の二つの点を確認した。

第一、〈抗日－親日〉の二項対立の構図の言説である。〈抗日－親日〉という二項対立の構図は、1945年以降の韓国「仏教浄化運動」、いわゆる日本的な色彩を有する韓国仏教(倭色仏教)を追い出すための運動からはじまり、1954年韓国大統領の李承晩の国家政策(植民地遺産清算)によってさらに強化された。それ以降、今日まで、この二項対立の構図は仏教界内部での状況とは無関係に当たり前のような言説となって一般的に使われている。

第二、「日本仏教」「朝鮮仏教」という用語の相互関係と概念化について。「日本仏教」という集団としての自己認識を有する用語は、1880年時点にすでに日本国内では定着していたが、朝鮮における「朝鮮仏教」という用語の登場は1894年のことである。そして「朝鮮」という自己認識を有する「朝鮮仏教」という概念の定着は、朝鮮独立運動が始まった1920年以降のことである。こうした過程の中で朝鮮の仏教関係者は近代仏教としての取り組みを始めた日本の仏教関係者と共に実施した教育事業、社会事業を通じて「朝鮮仏教」というナショナリティを強く意識するようになった。また、日本仏教も植民地という特殊な空間であるからこそ、「朝鮮仏教」関係者と身近に接することで宗主国としての「日本仏教」の自己アイデンティティをより強く有したのである。今回の研究では、こうした植民地における相互関係の中で「近代仏教」としての「朝鮮仏教」、「日本仏教」の姿を確認できた。勿論、「朝鮮仏教」というナショナリティを持つことで植民地権力との軋轢があったのは当然であろう。今回の研究から宗教の概念化が今日のように定着してない植民地時代の状況を念頭に置くなら、〈抗日－親日〉の構図の中から創出された「親日仏教」という用語は、1945年以降に、作り出された用語であることが分かる。

以上のように、今まで韓国の歴史学界、仏教学界で使われてきた「親日」「親日仏教」「親日派」という「親日」概念は、まるで植民地時代から存在していたように韓国歴史学会や韓国社会で広く使われてきたが、実際には1945年以降に定着した用語であることが確認できた。

### 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

諸点淑「近代仏教」としての日本仏教の語り方 - 近年の研究動向をふまえて - 『日本研究』65、2015.09

諸点淑「近代朝鮮仏教の〈親日－抗日〉の言説」『亜太研究』24号、2016.8 投稿予定。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)